

自然その頃私には湧いて来た。

ホトトギスへは、単なる読者で、例会へも一般参会者であり、雑詠の投句はしなかったし、勿論その内部の誰をも僅かに顔を見知るに過ぎなかつたが、たゞ虚子氏の古くからの文名とホトトギスの俳壇に於ける子規以来の来歴、それと、同誌の文壇に於ての過去の特殊な地位といふやうなものは、窃かに慕はれもした。曲水吟社に対しては、まだその何一つをも知らないが、偶然行つた句会の日感激があり、水巴先生への面接が私に二度とも快い印象を残した。零餘子氏の一派にはやはり一種の親しみが既に私にあつた。俳壇にも萌す党派的觀念といふやうなものも少しづつ、私にも解りだすと、自分の好む処に集るは、いとして、なぜそれ故他と円満に交渉し得ないかといふ事が、俳壇だけに、私には不思議千万に考へられてならなかつた。と同時に、何れに赴くか、この觀念がやはり私を支配しだし、たま／＼、与野の鈴虫狩は、何がなし私は行つて見たかつた。で史耕氏は暇がなくて行かれなかつたが、私は単独で加つた。零餘子氏を初め、赤堀月蟾氏、平野鶉子氏、子瓢氏、花囚君等といふ私も相識の人々がその一行だつた。

二

与野の鈴虫狩は別段の事もなかつた。停車場で一緒になつた同地の俳人十人ばかりと、程近い雑木山へ這入つて行つて、この十数人の同勢が、真昼間、森閑とした雑木林の草叢の中を八方搔廻したに過ぎない、鈴虫もたしかに啼いてゐたが、私の眼につくのは可愛らしい生れたての子ばかりで、しかし余り沢山に

ゐたから蟋蟀の子だつたかも知れないが、兎に角、私は一匹も捕れずに、誰かの捕つたのを二、三匹分けて貰つて来た。予野の人々の中に松本思桂君がゐた。思桂君は其の後曲水の例会にどうかすると見えたが、何時も黙々として甚だ温順な風格の人だつた。この日も別段言葉を交す機もなかつたが、やはり黙りがちに居て、大農の息子といつたやうな印象を得た。これと、歸りに、停車場近くの蕎麦屋の二階で、石油らんぶを吊つた下で蕎麦を御馳走になつて一寸驚いた事を覚えてゐる。それからもう一つ、歸りの汽車を待つてゐる中に、駅の構内の芒の中で松虫がにくらしい声で啼きだすと、誰か二三人蠟燭の裸火を持つて芒の中を探し廻つたが、結局これが一番に虫狩らしかつた。

終列車らしい汽車はをかしかつたくらゐ空いてゐた。我々は、灯ばかりともつて来た一車へ乗り込んだ。涼しい風は吹通しなり、帰るだけの用しかない、自然みんな噪ぎだした。やがて、何かの話のついでに其の中で湧きだしたのは、大分手ひどい話だつた。一番若い私はまださういふ類の話になると發言の資格がなし、たゞ、初めて大人同士のさういふ談話の中に入つた事に酷く吃驚しながら、しかし勿論面白く傾聴した。中で、零餘子氏だけは、一人離れて腰掛の隅に眼を閉ぢたがり、聴き手にも加はらなかつたが、皆の話は長い間はづんだものだ。そして時々をかしさうな顔を零餘子氏の方へも向けたが、零餘子氏は持前の大軀を腕組みして窓に倚りかゝつたまゝ、動く気配もなかつた。睡つてゐるのか、それとも聴きすましてゐるのか、兎に角、上野へ着くまで車中まるで一行とは別の人のやうな態度だ